

李栄薫教授の勇氣と知性——『大韓民国の物語』を読んで——

三輪 宗弘

「歴史随想」で一冊の本を紹介しなかった。『大韓民国の物語——韓国「の国史」教科書を書き換えよ——』（永島広紀訳、文藝春秋、二〇〇九年）です。学術書でないという理由から、この書物のすばらしさが日本で不当に低く評価されるのではないかと思つたからです。李栄薫教授が抑制に抑制を重ね、筆を進めなければならなかったことが、日本の読者に一体どの程度理解できるのだろうかと一抹の不安を感じたからです。高邁かつ知的レベルの高い著書が少しでも多くの読者の目に留まり、隣国で何が起こつたのか、我々は知るべきだと思ひました。何よりも筆者自身がこの本に、いや李栄薫の知性と勇氣と自由な発想に敬意を払ひたかつた。

隣国である韓国の歴史清算の動きに敢然と立ち向かつた知性と勇氣が端緒になり結実したのが『大韓民国の物語』です。著者の李栄薫は、日本軍の兵隊として戦地を転々とした韓国人にインタビューを行つたが、「天皇のために死ぬという誓いの精神世界は、逆説的に忠誠の対象が大韓民国に変わったときと同様な誓いへと引き継がれる論理的な必然性をもつていたのではないか」と温かい手を差し出し、後段で「特定の人物や集団に歴史の責任を押し付けたり、追及したりはしません。死者に言葉はなく、歴史の真実は永久に迷宮の中です。」（二七一頁）と述べます。道義に駆られ、正義を鼓舞して「断罪する」韓国に吹き荒れる民族

主義の歴史に解毒を施します。

過去の記憶を求めて多くの方の話を聞く李栄薫は、その大切さと同時にあやふやさを知悉するがゆえに、歴史家が一般大衆の集団記憶に埋もれてはならないと警鐘を鳴らし、「歴史家は一般大衆の集団記憶が政治的に企画され操作されうることを、史料に基づいて一般大衆に知らせる専門的な職業です」（七四〜七五頁）と指摘します。

私も歴史家の端くれですので、インタビュ어가どのような理由でも料理できることを知っています。端的に言えば、恣意的にどのようなようにも操れるのです。その一方でインタビュ어가着想のヒントになり、定説を覆す重要なヒントになることも経験しています。インタビュ어를通し、その人柄、性格がわかり、その証言の信憑性を嗅覚で分け、さらに資料で裏付けを取らなければならないのです。そのような時こそ歴史家の能力が問われているのです。インタビュ어의使い方には歴史家の真贋が如実に表れます。しかし残念ながら歴史家の中には大衆に正義感を鼓舞して、道義を訴える輩もいるのです。正義には際限がない恐ろしさが潜んでいます。

韓国の歴史家で埃の中から資料を探し出し、生存者にインタビュアして回る研究一途の李教授の姿勢は、本物と観

念で作り上げられた偽物を峻別せざるをえません。偽りの歴史で過去を清算し、断罪するようなことがまかり通る国には未来はないという、韓国に対する愛国心が満ち溢れています。愛国心というよりも危機感というほうが的確なのかもしれません。これは視野狭隘な国家主義者、民族主義者には李栄薫の葛藤や憂いは理解できないでしょう。「国家は自由の最後の砦だからである」（一九頁）という主張は、北朝鮮という狂信的な国家と対峙しなければならぬ現実からみれば当然のことでしょうが、李教授を国家主義者であると批判するものへの反論にもなっています。李栄薫は韓国に吹き荒れる民族主義への警鐘を鳴らしていますが、私は韓国の民族主義に強さというものの恐ろしさを読み取ることができました。「日本びいきの右派」というレッテルを張られ、韓国の横暴な民族主義者の「検閲に引つ掛かり、散々な目に遭い」、その挙句、人民裁判にかけられ、謝罪を強要される。一二万通の抗議のメールが送りつけられ、研究室のドアに卵が投げつけられ、ソウル大学校教授辞職の危機に追い込まれる寸前になったのです。民族主義者の検閲を意識して書かなければならなかったことは第二部の「7 日本軍慰安婦問題の実相」で李教授が言及し

ている日本人学者の名前を眺めればわかるでしょう。本意でなかったであろうことは私にはすぐ読み取れました。「自己検閲」を行い、じつと耐え、次章の一手に力を蓄えています。ここは表面的な字面だけでは、李教授の真意を読み取れなくなります。李栄薫の受けた傷の大きさは如何ばかりでしょうか。そのことも私には以心伝心で通じてきます。

李教授は植民地収奪論、民族主義の神話に対して資料で以って戦いに臨みました。供出米に関して「米が輸出されたのは総督府が強制したからではなく、日本内地の米価が30%程高かったからです」（七八頁）と指摘します。また、土地調査事業についてある教授は「片手にピストルを、もう片手には測量器を抱えて」と書き、ある歴史小説家は、土地調査に抗議した農民を日本人巡査が「木にくくりつけ、即決処分で銃殺を行う場面」を描くのですが、「法が存在していたという事実を完全に無視している」と李栄薫は嘆き、このような歴史を事実だと若者が思い込んだなら、「野蛮人のように乱暴に二十世紀の歴史というものを考えることでしょうか。なんとも恐ろしいことです。」（八七頁）と結びます。李栄薫の将来への憂いとこれではいけないという悲壮な決意が伝わってきます。前政権の歴史清算運動

である「過去史清算」のテレビ番組に出演したのも、「間違った事実認識に基づいている」、「社会に向かつて発言しなければならぬ」という一種の強迫観念にかられてしまった」（二七二、一七三頁）「もうこれ以上は黙っていることはできないという気持ちが高まっていたようです」と振り返ります。しかし李栄薫には、「日本の右翼と同じで「慰安婦」を自発的に金稼ぎに行った「公娼」であると発言した」という批判を受けるといふ悲劇が待ち受けていました。こんな歴史像が流布され、真実とされるならば、日韓関係は永久に亀裂が入ったままであるとの危機感もあったのでしょう。マッカーシズムに対峙したD・リースマンなどのアメリカ知識人を髣髴させるものがあります。いうならば韓国版マッカーシズムである親日派狩りに正面から挑んだのが李栄薫であったのです。書き出しでも述べましたが、我々は隣国で何が起こったのか、今何が起きているのか、知らなければなりません。

第二部「文明史の大転換」の「8 あの日、私はなぜあのように言ったのか」の中で抑制が利いた次の一文を書くために周到な準備を積み重ねていることに胸を打たれるものがあります。ここまで用心し、警戒し、ようやく次の文

章を章末に書くことができたのです。「私が見るところ、韓国において、慰安婦研究と市民運動は、朝鮮の純潔なる乙女の性を日本がほしのままに蹂躪したというたぐいの大衆的な認識をバックにしており、いまや一個人としてこれに逆らう勇気を出すのが難しい、権威と権力として君臨しているようです」と。

第二部の「7 日本軍慰安婦問題の実相」は、「8 ある日、私はなぜあのように言ったのか」を書くために挟まざるをえなかったのでしょうか。李教授の苦衷（自己検閲）が私には伝わってきません。「いまさら思い出したいくらいほどです」とある出来事とは何であったのでしょうか。人民裁判にかけられた発端になった問題への解答を用意した第二部「8」で李教授は渾身の一手を放ちます。日本軍、韓国軍、米軍の「慰安婦」がいたのに、なぜ日本軍だけが問題にされるのかと。我慢に我慢を重ね、周到な準備をしたうえで、聡明な頭脳から放たれた強烈な「耳赤の一手」に感嘆せざるを得ません。以下は筆者の推測ですが、大邱市の農家に生まれた李榮薫は、七才から一六才まで米軍基地のある倭館で育ちました。米軍基地周辺のありとあらゆるものを目に焼き付けていたのでしょうか。韓国動乱の年である

一九五一年に生まれたため、同期生が少なく、三年近く兵役につきました。その経験から得たものには、様々なものがあつたことでしょうか。

李榮薫の「耳赤の一手」に対して、どのような応手があるのでしょうか。無視して「知らぬ、存ぜぬ」と洞ヶ峠を決め込み、黙り込むのではなく、李榮薫を糾弾した国会議員、研究者に反論を展開してほしいと思うのは、筆者だけでしょうか。

話題を転じましょう。

古本屋で『入門韓国の歴史 国定韓国中学校国史教科書』（石渡延男監訳、三橋広夫共訳、明石書店、一九九八年）に遭遇し、早速買って読みました。李朝後期の描き方が李榮薫や東亜大学校教授の李勛相フンサンの把握の仕方と全く異なるのです。二人の李は李朝後期を両班や郷吏、常民、奴婢に分かれ、階層間の流動性に乏しく、農業生産性は低下していたと捉えます。

私をはじめて読んだ李榮薫論文「朝鮮における「一九世紀の危機」」（今西一編『世界システムと東アジア 小経営・国内植民地・植民地近代』、日本経済評論社、二〇〇八年、一九〇―二〇四頁所収）は、一読して実証の確かさ、引用文献の水

準の高さ、日本の江戸時代との違いを感じ、知的好奇心を喚起させられました。なぜ「一九世紀の危機」が大事なのでしょうか。内在的發展論つまり日本の統治に関係なく、韓国は經濟發展できたのだという見解が日帝時代への屈辱を晴らす癒しになるからなのでしょう。これにはもう一つの面である日帝学者への「朝鮮社会停滞論」への反発が秘められていることを押えておかなければなりません。「朝鮮社会停滞論」への反発、何が何でも拒絶すれば満足するというイデオロギーに陥り、それは相手の土俵で戦っているにすぎないことに気付かなくなってしまう。また日帝学者のデタラメを論あげつったところで、正しいかどうかは別の次元なのです。李栄薫はその論理的な問題を素早く見抜きます。資料に沈潜した歴史家はこんな安っぽいものに拘泥されるはずはありません。射抜く能力です。李栄薫は李朝末期の危機を認識すればするほど、「内在的發展論」に懐疑的にならざるを得ないのでしょう。

両班の次のセカンドクラスである郷吏を研究した李勛相は『朝鮮後期の郷吏』（法政大学出版会、二〇〇七年）の「緒論」中で、的確にこの問題点を指摘しています。

解放以降行われてきた朝鮮後期の身分制についての研

究は、共通の偏見にもとづいている。その一つは、身分制の解体を立証してこそ日帝官学者たちが想定した朝鮮社会停滞論を批判する課題に寄与しうると信じられていたことである。これとともに歴史發展において基層民の役割が決定的であると考える学者も、朝鮮後期以降身分制は解体一路にあったことを強調する。

…農業や商業の發展に関する議論までもがこれに合流することによって、身分制の解体はもはや疑問の余地のない通説としての地位を獲得した。しかしこうした仮説体系は基本的に不十分な經驗的根拠と、方法論に対する吟味なしに作りあげられた虚構であると思われる。（傍点 引用者）

『朝鮮後期の郷吏』の「訳者あとがき」で宮島博史は「本書が韓国の学界における主流の見解に対する異議申し立てであるということ強調しておきたい。特に、朝鮮後期における身分制の解体という主張は、主流の見解のもつとも核的な内容であることができるが、本書では、このような見解が、実証的な根拠にもとづいて、全面的に否定されている」と、李勛相の実証的な手法の確かさを高く評価している。郷吏が族譜編纂時に両班から受けた差別の

様相から、身分差別の実態を李勛相は明らかにしている。

韓国の『国定韓国中学校国史教科書』から主流派の見解を引用しよう。同じような表現がわずか五頁(二四六―二五〇頁)の中に少なくとも六回は出てくるのです。

朝鮮後期には身分の上下の移動が活発になり、両班の数がかなり増えた反面、常民と奴婢を解放せざるをえないほどに身分制がゆらいでいた。

真理は何処にありや！ 歴史認識とはいったい何なのだろうか！ 「朝鮮後期」に関する見方、二人の李と韓国主流派の間には大きな埋められない溝が横たわっていることは一目瞭然です。『国定韓国中学校国史教科書』の書き方は、学問論争が行われている問題の一方的な一面だけを若い生徒や学生に強制するという乱暴なやり方、その問題点を教科書に携わった書き手は何にも認識できていないのです。まさに『国定韓国中学校国史教科書』が糾弾する「独裁政治」そのもののやり方なのです。

『大韓民国の物語』第二部「文明史の転換」の最初の章で「李朝はなぜ滅んだのか」というテーマを掲げ「歴史学者は李朝が滅んだ原因についてきちんと話をしないままでいるようです。歴史教科書を読んでも、李朝が滅んだ理由に

ついては何の説明もありません」(五八頁)と指摘して、日本が侵入してきて滅んだのならば、なぜそれを防げなかったのか、「真摯に問い直さなければなりません」と切り返します。「寶石にも似た美しい文化をもつ李氏朝鮮王朝が、強盗である日本の侵入を受けた」(三三〇頁)では歴史家は何の説明もしていないのと同じであると喝破します。簡潔に言えば、無秩序な伐採によって山林が荒廃し、土地の生産性がほぼ三分の一の水準にまで落ち込んだことが李朝崩壊の原因なのです(六四頁)。詳しくは先に言及した「朝鮮における『19世紀の危機』」論文をひもといていただくのがいいでしょう。

『現代コリア』二〇〇六年一月号(韓国の総合雑誌『月刊朝鮮』八月号に掲載されたインタビュの翻訳)に「民族主義で先進化はできぬ 自由主義が民族主義の代案」という記事の中で「私は奴婢史に対する研究から出発しました。朝鮮時代には人口の最大四〇%が奴婢で、奴婢に対するさまざまな差別が存在しました。……日帝時代に社会的解放がなされると、心から日帝に協力する人たちが出たものです」と李榮薫は答えています。

なぜ奴婢が減ったのか、「白丁」<sup>ベクチョン</sup>が日帝下でなぜなくなっ

たのか、私は大変な興味を感じました。差別された「白丁」がどの程度渡航して日本に来たのか、知りたいと一瞬ひらめきました。「ホルモン」という言葉は関西と九州にはありますが、東京にはありませんでした。来日した「白丁」がもたらしたのでしょうか。また小作はどうだったのでしょうか。私も研究に参戦したくてウズウズしてきました。

李朝後期への評価という問題を通して、韓国の民族主義歴史観というものの実態が浮かび上がってきます。この背景、この背後に潜む問題点を日本人である我々はしっかりと頭の中に入れておかなければならないのです。幸運なことに、李栄薫の寸鉄の鋭さを持ち合わせたリーダーは、韓国の病理をスクリーンに鮮やかに映し出してくれます。

李承晩への評価、「反民特委」など取り上げたいのですが、『大韓民国の物語』を直接読まれるのが最善でしょう。韓国の反米主義もあわせて理解できるでしょう。評判の悪い李承晩大統領に対する愛情に満ち溢れた石の運びを眺めながら、李栄薫の保守主義が本物であると私は思いました。錦の御旗の正義感を謳う研究者とは質が違うのです。私も李承晩大統領に関する外交文書を米国国立公文書館でじっくり読んでみたいと思いました。

日本と韓国の歴史認識が共通の基盤に立てる可能性を引き出した、勇氣と知性に満ちた本書に出会え、日韓の歴史認識が怨念から事実に基づいた史実の解明につながる日が近づいたと感じました。一筋の光明がみえてきました。歴史の解釈は様々であり、国による記憶の違いがあり、際限のない道義で断罪することがないようにしたいと思います。その基盤となるのが記録です。文書です。日本が収奪していないと李栄薫が確信したのは日本が行った土地調査の大量の文書群という記録が残っていたからなのです。朝鮮総督府の土地調査資料があったから、搾取神話に対して説得力ある反論を提示できたのです。私は改めて記録文書を後世に残し、審判を仰ぐことの大切さを教えられました。歴史家の知的廉直さの大切さも痛感いたしました。李栄薫と一緒に釜山市内から郊外の金海国際空港に向かう車中で金海デルタの土地の話を伺いました。いちいち説明はしませんが、読者賢者には『大韓民国の物語』八四頁でそのエッセンスを堪能いただければと思います。朝鮮総督府は小作農に有利な条件で土地を払い下げていたのです。

日韓関係が無益な怨念の歴史から解放されるのは知性と記録が揃って初めて可能になるでしょう。李栄薫は「文

明史」という概念を持ち出します。正直最初は戸惑うのですが、李栄薫の狙いは「二十世紀における韓国の歴史を日本との関係だけに限定する偏狭な視角から脱却させ、文明史の大転換という、より幅広い視角から見直す必要があります」と述べ、はじめて全貌が眼前に現れてきます。韓国の民族主義を批判するのは李栄薫教授グループの知性にお任せし、いや韓国の良心にゆだね、日本の研究者としては隣国の民族主義の実態を知っておく必要があります。どこの国でもあることですが、こうあってほしいという願望が歴史的事実と混同され、それが一人歩きし、大衆神話になるのかもしれませんが。筆者がある韓国の大学で『大韓民国の物語』について話すとメールでお伝えしたら、李教授から「韓国は民族主義という乱暴な怪物が支配しているまだ十分に現代化されていない国であることについて深く用心してください」という返事が届きました。釜山でデモクラシーセンターを見学しましたが、李承晩大統領、朴正熙大統領への罵倒に満ちていました。韓国の左右のイデオロギー対立の激しさを実感するとともに、『大韓民国の物語』の理解に大いに役立ちました。

ある韓国人の研究者の前で「李栄薫」の名前を出したら、

シニカルな表情で笑いました。筆者が素晴らしい歴史家だと評価したら、冷笑をやめました。韓国国内のアカデミックな雰囲気では、「李栄薫」という名前を耳にした時、冷笑して嘲るというポーズを取るのが学者の雰囲気なのかもしれないと思いました。

族譜の研究が盛んな韓国で、契冊などに記された二〇〇年間もの物価データを丹念に読み、論文を組み立てる訓練を受けた歴史家が、韓国の民主主義を支えているのだと私は思いました。

左の文は勇氣と知性なくして書けません。

取奪論は、一九六〇年代以降の韓国において、民主主義が高揚するにしたがって一部の無責任な学者によって適当にでっち上げられた挙げ句、大衆の集団記憶として広まったものに過ぎません（三四一頁）。

江戸時代の天才棋士本因坊秀策の華麗な打ち回しに思いを馳せながら、筆を擱きたいと思います。

（みわ むねひろ）

九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門教授